

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
もり た かず お 森田 和夫	男 性	8 4 歳 H27.8.15 現在	1 4 歳	西新町

「14歳が見た豊川海軍工廠」

昭和20年に入り、学徒動員令により国民学校高等科は授業が停止され、工場などへ動員されることになりました。学校では、「参加できない者は理由を書け」と言われました。当時私は14歳で、新城国民学校高等科2年（今の中学2年）でした。家庭の事情や進学受験を理由にすることもなく、豊川海軍工廠へは新城国民学校から15名が参加することになりました。飯田線沿線の者は通勤、山手の生徒（千郷、日吉、山吉田など）は寮に入りました。3月いっぱいには学徒で過ごし、卒業と同時に工員養成機関の工員養成所見習科工員となって、全寮制の寄宿舎（現在の豊川工業高校あたりに養成所と付属の見習工員寄宿舎が併設されていた）に入りました。

そこで海軍工員になるための基礎教育、職種別の専門的な実習教育が行われました。寄宿舎といっても日常生活は海軍の軍隊式で、起床ラッパで起こされ、消灯ラッパで就寝です。教育面では、元中等学校、高専の海軍教授、助教授による一般教養、教練では歴戦勇士の上等兵曹による厳しい新兵同様の指導がありました。

体罰は日常的 ～ 精神注入棒も

寮生には1期生から6期生がいて、私たち新人は6期生です。海兵団を終えた見習2期生が寮長になり、各部屋で新人を鍛えるのは1年先輩の5期生で部屋長です。日々の日常行動の指導を厳しくと、知らず知らずのうちに海軍魂が身について、白は白、黒は黒と言えない生活が続きます。先輩の命令は絶対なのです。

私の当時の日記には、寮に入った当初から空襲で夜中に起こされたこと、睡眠不足で授業中に「コックリ、コックリ」して担当教授のムチがとんだこと、いつも空腹とノミ、シラミに悩まされたことなどが記されています。楽しかったことはありませんでした。でも、親弟妹、そして友だちからの便りが唯一の楽しみで、時おり母親が食べものを持参しての面会が唯一のやすらぎのひとつで、後で部屋にもどって仲間と分け合って食べました。

一生懸命行動したつもりでも、先輩達からは「今日のお前たちの行いはなっておらん！」と何らかの理由をつけられます。一人の者が悪くても部屋全員の連帯責任で罰則のあらしです。「起立！、股を開け！、歯を食いしばれー！」とビンタ、鉄拳がとぶのです。「痛い！」なんて叫ぼうものなら、またやられます。みんな歯を食いしばって耐えるのです。「精神注入棒」といわれる樫の木のかん棒が寮長室にいつも架けてありました。ひどい時には、その硬い棒で尻を打たれることもあ

りました。入浴時に見れば尻に痛々しい青あざができています。昨晚やられたな、とすぐ分かります。とにかく、とんでもない所に來たもんだと思っていました。こんな状況を親が見たらどう思うかと、夜の人員点呼で各自がそれぞれの故郷の方を向き、親族達にあいさつの「礼」とする時には涙が出ました。それでも、共に辛苦を体験した仲間との絆はいつそう強まり、その絆は年をとっても変わらないものとなっています。

運命の8月7日

毎日のように空襲警報が発令され、その警報が日常茶飯事になった頃、豊川にもB29の大編隊が襲いました。私の学級は、この日の午前中は養成所で授業、午後は廠内実習の予定でした。ちょうど10時30分頃か、空襲警報が発令されました。外に出て見たら、何ともうB29の編隊がすぐ近くを工廠に向かってるのが見えます。「総員退避！」で備え付けの防空壕へ入りました。ちょうど黒いものが落ちてくるのと同時に「ザッザッザッ！」「シャシャシャ」と、いろいろな音を発して着弾しました。ただ掘っただけの壕は、着弾のひびきで両側の土が崩れます。想像以上のものすごい音響です。おそろおそろ外を、空を見上げれば黒煙がもうもうと、物資部の方角に（今の郵便局のあたり）立ちのぼっています。着弾による地響きは、遠く離れていてもおそろしい揺れを感じました。とにかく初めての体験で、腰が抜けそうになりました。立ちのぼった黒煙の中で見た太陽が黒かった、黄色かった、赤かったと後で口にする人たちがいました。何波ぐらい来ましたか、編隊が爆弾を落として次の編隊が……。

約30分ぐらいか、わずかな時間にあれだけの工廠内の工場群は壊滅状態になりました。もう、授業どころではありません。庶務や先生方の指示で死傷者の救助に当たることになりました。



廃墟と化した工廠：桜ヶ丘ミュージアム提供

死体の処理をすることに

雨戸を外して四隅を持って工廠へ出向きました。この折に、爆風の恐ろしさ、すごさをかいま見ることになりました。夏の暑い日です。寮の窓は開いていました。そこへ爆風が入ると壁に当たり天井へ、天井を抜けて瓦に向かいます。外から見ると、窓が開いているところの屋根瓦は、みないざって（ずれて）いるのです。爆風にあおられ、塀にたたきつけられて落下し、即死した死体が目に入ります。立ち木に引っかけた遺体に頭がない、腕や足だけが散乱している、黒こげの体がころがっている、あまりの悲惨な光景に、私は目をそむけるばかりでした。

立派な病院の建物が、今の体育館あたりにありましたが見当たりません。爆弾で吹き飛んでしまったのか、殺風景な焼け跡になっています。正門の前には機銃砲台があったけど、これも吹き飛んで跡形もありません。爆弾が落ちた跡は、直径が5, 6 mぐらいのすりばち状の穴があいています。爆弾の破壊力はすさまじく、猛烈な爆風と熱風、火災により、一瞬のうちに地獄の光景にってしまったのです。救助に来たといっても、手のつけようもなく、4人はただぼうぜんと立ちすくむばかりでした。そんな中でもあれこれと指示をする人がいて、私たちもそれに応えて死傷者を雨戸に乗せて運びます。自分たちの寄宿舍が救護所になっているので、ただ黙々と運びます。雨戸が水平になっていればよいのですが、低い方へ負傷者の血が流れます。着衣に付いて困りましたが文句も言えません。黙々と運びます。「痛い、痛い」の連発、「うーん、うーん」と唸っている人への言葉かけにも困ってしまいます。時が経つのを忘れるほど動きづめで食もせず、休息所でのひと休みした時は、疲労感、空腹感がどっと押し寄せ、差し出されたおにぎりを手も洗いもしないでほうばりました。私たちがいた部屋も負傷者の部屋となり、私たちは養成所の教室で就寝、着の身着のままで休むことになりました。

明くる日もまた次の日も、死体運びや運動場だった広場で穴掘りをしました。そこへは、氏名判明者として記録した遺体をそのまま埋めました。遺体置き場には、両眼が飛び出している人、女性はモンペ姿で体内にガスが溜まってパンパンにふくれあがった人など、見るに見られない姿になっています。工廠の幹部でさえこのような惨状は初めての体験で、指示を出すのもこれまた大変であったと思います。

「八七会」のこと

豊川閣（豊川稲荷）の裏に、終戦後すぐに元従業員達が、『八七会』の名称で供養塔を建立し、毎年盛大な慰霊祭を行ってきました。当時の方々は年々少なくなり、一番若かった見習工員出身者が後を引き継ぎ、現在15名ほどで月2回、7日と20日に集い、清掃作業をし香花を捧げ焼香して、供養塔に眠る散華した方々を弔っています。その時、供養塔の両側に毎回千羽鶴を折って捧げてくださる92歳の元共済病院の看護婦さんがみえます。本当に頭が下がります。

今年は70年目を迎え、清掃する者も年をとり、続けることが困難になってきましたが、今後のことは八七会として考慮中です。

あの人殺しの戦争を体験した者にとって、二度と繰り返してはならないと心に誓っている現在です。



八七会で建立された供養塔